



話題の本棚

マーカス・デュ・ソートイ著、富永星訳『レンブラントの身震い』
源河亨著『感情の哲学入門講義』

特集／短編

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／歴史哲学への誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/

創作に挑む人工知能が残した遍歴の軌

レンブラントの身震い

マーカス・デユ・ソートイ著

富永星記 新潮社



将来的に、全ての小説はAIによって書かれることになるでしょう——そんなことをバイト先で理系の同僚から聞いた。当該分野に明るくない評者は本当だろうかと半信半疑でいたのだが、そんな折本書をルネで見つけ、手を伸ばしたのだった。

AIによるレンブラント、バッハ

本エッセイによると、AI（人工知能）が小説家になるといわれるのは、今はまだ現実的ではないらしい。例示された物語の一節は、文法こそ正しいものの支離滅裂な内容であった。とはいえこの本に収められた数々のエピソードからは、AIの計り知れぬ創造性が窺える。今世紀に至るまで数々の研究者が、その予想以上の可能性を明らかにしてきた。そこで鍵となるのがアルゴリズムである。ある問いから一つの答えに至る一本の道のようなものだ。AI達はデータの精査と可能性の試行を経て、より目的に合う通行路を探り出す。

その過程は、偉人たちが生涯をかけて積み重ねた遺産を瞬く間に吸収していく凄まじいものだ。例えばバッハの楽譜からバッハ風のメロディを作曲し、あるいは三六枚のレンブラント作品を基にして彼らしい筆づかいを体得するのだ。本書の表紙にもAIによって描画された肖像画が紛れており、その巧みに驚嘆させられる。

軽やかで茶目っ気すら感じさせる著者の叙述は、輝かしいAIの活躍だけでなく、今現在AIが到達している座標をも冷静に捕捉している。人工知能は碁の盤上で、人智を超えた美しき勝利の方程式を導き出すことができる。新しい数学の証明を構築し、更にその正否を確認することもできる。しかし文学作品の情感を捉え翻訳するのはまた難しい。作家の文体は掴めても、大局的な物語構造は作りづらい。本書を執筆したソートイは数学者。彼は同じ理系分野の間だからこそ見えるAI開発の現状についても鋭く指摘している。

人間とAIが学び合う世界にたどり着く前に

「AI芸術革命を前進させているのは、芸術的な配慮ではなく金なのだ」というソートイの言葉は重い。研究資金獲得のため、開発者らが大衆好みのアピールをする必要があったのも確かだが、今や流行に乗った企業広告として、AIの二文字は乱用される一方だ。他方で世界に張り巡らされた動画サイト、通販サイト、ニュースサイトの網は、アルゴリズムを介して利用者の趣味嗜好、判断を方向付けている。「こちらもおすすめ」という表示はAIによる推薦なのだ。

このようなAIが浸透し切った人間社会の問題を解決するには、文理を問わぬ「人間知能」が要請されるはずだ。ソートイはAIと人間の相互理解の必要性を訴え、両者の創作という営みを探索する意義を述べている。その主張を好意的に捉えるならば、本書は不毛な分断が進む諸学問における相互協調をも促していると言える。評者としてはまず、AIへの関心を引き出してくれた件の知人との分野横断的な対話の手引として、この稀有な啓蒙書を活かしたい。(7)

(三九八頁 本体二五〇〇円 11月刊)

あなたの「悲しみ」はどいかに？

感情の哲学入門講義

源河亨著

慶應義塾大学出版会



「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ。心理学を多少なりともかじったことがある人ならば、このフレーズを耳にしたことがあるだろう。これは、ジュームズ・ランゲ説という、身体反応への気づきこそが「感情」であるとする理論を端的に表したフレーズである。この理論は、それまでの「感情」理論に対して新しい考え方を示した一方で、我々が本当に身体反応だけから感情を断定することができるのかという問いには、未だ答えられていない。

このように「感情」にまつわる様々な学説は、今も多くの課題が残されている。本書はそんな「感情」を巡る諸問題を考えながら、「感情」とは何かということを考えていく入門的な哲学書である。

著者は、自分を取り巻く状況が持つ価値に対する反応であるという「感情」の性質を重視し、身体反応だけでなく、思考も大きく関わっていることを指摘する。そして、ラザルスとアルフォートが行なった、同じ映像に違うナレーションをつけ、二つのグループでの身体反応と「感情」の差を調べるといふ実験を参照し、「感情」には、対象の価値を捉える思考が大きく影響していることを示す。

しかし、それでは言語的な思考を持たない赤ちゃんは「感情」を保持していないことになってしまいます。そこで著者は、「感情」に影響

をもちたらず「思考」には、非言語的な思考も含まれていると考え、「感情」は「価値を捉える思考と、価値に対処するための身体的な準備の組み合わせ」として理解できると結論づける。本書はこのように、具体的な実験結果を参照しつつ、我々の生活実感を大切にしながら、様々な「感情」の様に迫っていく構成になっている。

そして、最も考えさせられたのは、なぜ人はわざわざ悲しい音楽を聴くのかという、負の感情のパラドックスに関する議論である。本来「悲しい」という「感情」は、何かを喪失する時に生まれてくるものであるが、音楽を聴く時には、何も失われていない。悲しみを生み出しているのは、喚起されたイメージであり、メロディ自体ではない。ここで著者は、悲しいメロディとは、悲しみを抱いた人の行動と似た特徴を持つメロディではないかと考察する。またさらに重要な指摘は、悲しいメロディから我々が得ているものは、悲しみだけではないということだ。悲しいメロディを聞いて、悲しくなるだけではなく、そのメロディの美しさなどに興奮を覚え、喜びを得ている可能性がある」と著者は述べる。しかし、本書での悲しい音楽に関する議論はここで終わっている。

評者は、この議論を通して、ただ悲しいだけであった記憶を、悲しいが甘美なもの、美しいものにしていく行為こそが、悲しい音楽を積極的に聴くということなのではないかと考えた。これはあくまで自分の考えに過ぎず、普遍的な答えではない。しかし、答えが決め切れない「感情」の問題について、本書は間違いなくその答え探しを進めてくれるものであった。

(一)四〇頁 本体二〇〇〇円 一月刊 (未しゆ)

女性作家が選ぶ太宰治

太宰治著
講談社文芸文庫

気づけば共感している。赤裸々に私心を打ち明ける語り手に。それを創り出した作家に。そして、それらを読み解く名人達に。引きずり込まれるのか、引きずり出されるのか。太宰作品から生じる読書の多層性がここにある。

本書に収められた短編は七つ。代表作「女生徒」をはじめ、繊細な心情を吐露する珠玉の物語が連続する。各編それぞれに、推挙した七人の作家が短評を寄せており、自分とは違う読み方に出会うはず……なのだが、つい彼女らの目線に引き寄せられてしまう。角田光代の如く、文豪に心酔する「恥」の語り手に自分を重ね、桐野夏生のように「思い出」の作中で太宰の姿を探ろうとしてしまう。読者は、次々と語られる「私」たちの思考に感化され、いつしか現実にとらわれた自分を忘れるめり込んでしまうはずだ。

中でも山田詠美が選ぶ「懶惰の歌留多」は魅惑の一作だろう。あまり知られていない本作の書き出しは実に太宰らしい。「私の数ある悪徳の中で、最も顕著の悪徳は、怠惰である。」書けない太宰がいろはに合わせて徒然に筆を進める本作に、山田は自身の姿を見て取りこぼす。自分の悪徳に怠惰と書いた治め！ 私には、それが唯一無二の小説家の美德であると解るよ。」太宰を読む山田の告白。太宰自身、同作において短編を読む様子を描いている。「変な文章ではあるが、読み易いので、私は、このような心のうつろな時には、取り出して読んでみるのである。」この通り本書が描く読書行為は、極めて多層的である。

破滅的な人間失格者。だからこそ書ける心理がある。選者たちはそれを見逃さない。小説に論評と、厚みのある短編集だ。（とよ）

(256頁 本体 1350円)



特集

短編

「短編って短いじゃん？でもデカいんだよね、これが。何がデカいかって、新しい話にどんどん出会えるワクワク感とか、読み終えた時の感動とか、知らない作者に出会えることとか……」でも、長編だって面白いよ。」たしかに。でもね、短編って、全力百メートル走の繰り返しみたいで、長距離走とはまた違った面白さがあると思ったりして。」

「なるほどー！もっと短編の面白さ、知りたいな！」「百聞は一見にしかずって言うじゃない？短編の特集組んだから読んでみて！」

(出席点)



回復する人間

ハン・ガン著 斎藤真理子訳
白水社

ハン・ガンは、アジア人で始めてマン・ブッカー国際賞を受賞した韓国文学を代表する作家の一人。彼女の描く世界はいつもしんと静まり返っている。そこには冬を感じさせる冷たい空



気がすうっと流れている。そこにあるのは深い孤独と暗い絶望だ。しかし本書収録の物語には、わずかな希望もまた見え隠れする。傷と回復、闇と光、絶望と希望——これらが織り合わさって、七つの短編を形づくっている。本書は、冬の凍てつくような寒さと同時に、春の温かい息吹を感じさせる。

最初の短編「明るくなる前に」に登場するのは、自分のせいで弟を死なせてしまったと苦しみ続けるウニ姉さん。そんなウニ姉さんに向かって、自身もがんで苦しみ続けた主人公は、切にこう呼びかけようとする。「そんなふうに生きないで。私たちに過ちがあるとすれば、初めから欠陥だらけで生まれてきたことだけなのに。一寸先も見えないように設計されて生まれてきたことだけなのに。姉さんの罪なんて、いもしない怪物みたいなものなのに。そんなものに薄い布をかぶせて、後生大事に抱いて生きるのはやめて」——。

本書が描くのは、何かしらの傷を負った人々、痛みや苦しみとともに生きる人々、世の中心からどこか外れた人々たち。しかし彼らは、傷を抱えた状態で立ち止まるわけではない。彼らは少しずつ回復の過程に乗り出していく——「まぶしい陽射しが帰ってくる。〔……〕生命たちがやってくる。もう少し持ちこたえることができるなら。後悔、苦痛、深く突き刺す自責の思い、消えない顔たちに背を向けて、あともう少しだけ。冬が終わり、春がやってこようとしている。（ばや）
(401頁 本体 2400円)

乳と卵

川上未映子著
文春文庫

二〇〇七年の芥川賞受賞作『乳と卵』。各国で翻訳が決まり、世界的に評価されている『夏物語』の前編となる短編小説であり、「出生」を巡る普遍的な問題を提示している。



豊胸手術を受けるため、卷子は娘の緑子を手連れて、大阪から「私（夏子）」の住む東京にやって来た。緑子は卷子に一切口を聞かず、日記の中で、豊胸に拘る卷子や自分の身体の成熟、そして生殖そのものに至るまで、様々なものを嫌悪・非難する。一方、出産によって自分の乳房が変になったと感じている卷子は、豊胸への拘りを頑なに捨てようとしな

く。ここで考えさせられるのは、子を産み育てるという営みは、我が子に自分の多くを「搾取」させる営みでもあるという現実だ。出産によって萎んだ卷子の乳房は、そういった「搾取」の象徴でもあり、彼女の豊胸への拘りは、緑子の視点から見ると、自分が生まれてきてしまったことへの罪悪感を喚起するものであったと言えるだろう。

そして、産み落とすこと、産み落とされること、育てること、育てられること……それらに関する二人の心情が精緻に描かれているからこそ、玉子を自らの頭にぶつけながら想いを吐露し合う終盤の一場面は、真に胸に迫るものがある。読者がたとえ男性でもあっても、二人の葛藤は理解できてしまうだろう。

最後に、大阪へと帰っていくこの二人の姿を見ながら、我々はなぜ卷子と緑子が親子たり得るのかということを考えさせられる。評者は、説明などしようのない深い「愛」こそが、その問いに対しての答えであると、そう強く主張したい。「出生」を巡る親子の葛藤と「愛」を、美しい文章で是非。（ましゅ）

(138頁 本体 500円)

エレンディア

G.ガルシア＝マルケス著
 鼓直・木村榮一訳 ちくま文庫

ノーベル文学賞の受賞経験ももつ、ラテンアメリカの代表的作家・ガルシア＝マルケスの短編集を紹介しよう——中編「無垢なエレンディアと無情な祖母の信じてたい悲惨な物語」を中心に編まれた『エレンディア』である。本来ならこの表題作を紹介するのが書評のセオリーというものかもしれないが、ここではあえてひとつめの短編「大きな翼のある、ひどく年取った男」を取り上げたい。

その男は中庭の奥で倒れていた。「雨でずぶ濡れになった曾祖父を思わせる惨めらしい格好」に「大きな秃鷹そっくりの翼」を生やしたその醜い男は、まもなく隣家の女から「天使」と断定される。この珍事の発生に、にわかに町は弥次馬騒ぎとなる。移動サーカスがやってくる、家主たちはこの「天使」の観覧料を徴収しはじめる。カリブ海じゅうの重病人たちが快癒を願って「天使」のもとに集い、本物の天使かをめぐっては、ローマ法王に手紙まで出される始末である……言葉を交わすこともできない「天使」の周囲に起こる人々のから騒ぎは、もはや滑稽ですらある。しかし、この「天使」の細部をめぐると、時にグロテスクな描写が、この奇妙奇天烈な出来事に独特のリアリティを与えている。

このような、小さな閉じたコミュニティの中に闖入した余所者が、その構成員からやがて特別な〈記号〉を付えられる、というストーリー展開は、同じく本書収録の短編「この世でいちばん美しい水死人」にも共通する。この、ガルシア＝マルケスのいわゆる〈マジック・リアリズム〉全開に書かれた不思議な作品世界は、他では得がたい貴重な読書体験を我々読者にもたらしてくれる。(八雲)

(208頁 本体 540円)



イエレナ、いない女 他十三篇

イボ・アンドリッチ著
 田中一生・山崎洋・山崎佳代子訳 幻戯書房

カトリック、セルビア正教、イスラム教、ユダヤ教が混在する街サラエボ。この街には四つの聖所と四つの祈り、そして四つの時間の流れがある。それ故午前二時の鐘が鳴る時、その音は僅かな時差を隔ててそれぞれ鳴り響く。マックスは感じる、決して重ならぬ鐘の音は眠りの間も人々に憎悪を植え付けているのだと。そして言う、「ボスニアは憎悪の地です。」

イボ・アンドリッチの短編「一九二〇年の手紙」の一場面だ。サラエボの鐘が聞きたい、この作品に突き動かされた評者が「憎悪の地」に足を踏み入れたのは一九の冬だった。

ユーゴスラビアを代表する作家アンドリッチ。彼はボスニアに生まれ、第一次世界大戦、ナチスによるユーゴ占領、チト体制と激動の時代を経験する。そんな彼の作品がいつも映し出すのは宗教や民族同士が生み出す憎悪、そして彼らと共に移り替わる祖国の街である。

先の短編でも登場人物の一人マックスは宗教だけでなく街を包む鐘の音に、それから第一次大戦で疲弊したサラエボ自体に憎悪を見出す。やがて彼は憎悪と同化した街を去る。

祖国への作家の感情はいつも複雑にもつれあう。それはその生涯ゆえだ。だが彼の作品の根底にあるのは、人間は不条理をどう生きるかという問いである。マックスも述べている、ボスニアを去るのは憎悪を断ち、人間の責務を最後まで遂行するためと。その後彼はスペイン内戦に臨み正義のために命を懸ける。

本書『イエレナ、いない女 他十三篇』には上の短編以外にも、著者の死後に起こったユーゴ内戦や民族間の軋轢をまるで見通していたかのような短編も多い。サラエボの鐘は今なお有効な警鐘として響き渡る。(リンダ)

(448頁 本体 4500円)



日本SFの臨界点

【恋愛編】死んだ恋人からの手紙

伴名練編 ハヤカワ文庫JA

短編は、恋に似ている。一瞬のようで、それでいて永遠のような物語。そんな誰かの物語に、思いを馳せる。

本書は『なめらかな世界と、その敵』の著者・伴名練氏が「SF×愛」をテーマに編んだアンソロジーだ。短編集未収録作品を中心に、現在手に入りにくい作品が収録されている。前半は柔らかめ、後半は硬めの作品が並ぶ。SF初心者もベテランも共に楽しめるラインナップだ。

その中でも指折りの作品の一つ取り上げよう。扇智史「アトラクタの奏でる音楽」だ。舞台は未来の京都。主人公は二人の女性。京大工学部の待理と、シンガーソングライターの鳴佳だ。二人は夜の三条大橋の交差点で出会う。待理はバーチャルとリアルで音楽を融合させるシミュレーションの協力者を探していた。そんな彼女は橋で歌う鳴佳に「研究対象」として興味を持つ。

ズボラな学徒とエモイライバー。交わるはずのない二人の世界線が、五線譜の上で絡み出す。二人は友達？ 研究対象？ この実験が終わったら、二人はどうなるの……？ [喜][驚]などの「タグ」をバーチャル上でつけて話すこの世界で、鳴佳は「タグもつけられない気持ち」を抱き始める。そしてその心臓のリズムに相手もまた共振して……。鳴り、響き、踊り。揺れ、震え、そして歌う。冬の寒い夜、三条大橋の上。二人の歌声が重なって、そして……。

恋は、短編に似ている。永遠のようで、それでいて一瞬のような物語。星の向こうに、電子世界に、中世ヨーロッパに。それぞれの場所で、それぞれの物語が響き合う。少し不思議な、SFの恋の物語をあなたに。(出席点)
(390頁 本体1000円)



どこか、安心できる場所で 新しいイタリアの文学

パオロ・コエツィティ他著 関口英子他編 飯田亮介他訳 国書刊行会

短編を読むことは、小さな旅行に似ている。パスの待ち時間、電車に揺らる瞬間、授業の合間、ふとした時にページを開き、そこからあふれる物語に今を忘れる。この度は21世紀のイタリアへ出かけてみよう。

「どうせまた、エーコやカルヴィーノでしょ」と思ったそのあなた、ちょっと待ってほしい。確かに巨匠だが、彼らはもう前世紀の作家だ。本書で紹介するのは、そのほとんどが日本初紹介となる若手作家たちのアンソロジーだ。

タイトルにある「どこか、安心できる場所で」は1988年生まれのフランチェスカ・マンフレディの作品。母親が妊娠しもうすぐ姉になるマルタはどこか困惑を抱えていた。今まで母を独占してきたのに、赤ん坊が生まれたら自分はどうなるのだろうか。そんな不安を抱えたまま、年の近いヴェロニカと会い、秘密の性的な遊び連れてかれてしまう……。

ソマリア移民二世のイジャーバ・シェーゴ著「私は誰？」も面白い。著者と同様、作品の主人公もソマリアにルーツを持つファトゥ。ジャーナリストから差別を受けながらも、姉の持ってくるソマリアの価値観にも入れない。イタリアにもソマリアにもなじめない彼女は自分自身に尋ねる、私は誰……。

本を読み終わって顔を上げたら、いつもの景色だった。しかし頭の中では未だ見ぬイタリアの残像が漂っていた。同時代の好きな作家が出来る、新作が待ち遠しくなる。なんとなくイタリア語の教科書を手に取り、たどたどしく発音を練習してみる。次の新作は原文で読めないかな。本を読んだだけなのに、本当にイタリアに行きたくなった。(きもの)
(328頁 本体2400円)



新刊コーナー

さよなら、男社会

尹雄大著
亜紀書房



中学校の教室や廊下、そこでは休み時間になると数人の男子がスカートめくりをする。

スカートをめくられた女子は「やめてよ」と言っているのに、男子は女子が本気で嫌がっているわけではないと勝手に解釈し、スカートをめくっては仲間内で盛り上がり続ける。スカートめくりは単なるおふざけ。目くじらを立てて怒るほどのことでもない。男子はそう考える。女子の声は男子に届かない――。

どこか見覚えのあるこんな光景から、本書は始まる。なぜなら、スカートめくりという学生時代の一場面にも、男社会をめぐる問題がすでに組み込まれているからだ。男子が女子の訴えに耳を傾けようとしないう。スカートめくりはれっきとした加害行為であるのに単なるおふざけとされてしまうこと。被害者である女子は誰からもまともに取り合っ

てもらえないこと。女子が直面するこれら不条理な出来事は、紛れもなく男社会の産物だ。

著者は、自分が実際に見聞きしたこうした身近な出来事から議論を展開していく。好きな子への嫌がらせ、更衣室での下劣な会話、テレビで芸人が繰り広げる下ネタトーク。あるいは「要するに何が言いたいのか」「もっと論理的に話してくれないかな」といった言葉たち。これらがその議論の対象だ。著者はここにひそむ男社会の構造や文法を明らかにしていく。本書を読み、男社会の問題に気づいたら、自然とそれに別れを告げたくなるだろう。「さよなら、男社会」と。(ばや)

(二〇八頁 本体一四〇〇円 12月刊)

詩人の生

ローベルト・ヴァルザー著
新本史斉訳 鳥影社

報われる詩人の生涯など極く僅かだ。世事に打ち直めされ、孤独に直面しようとも、書



他に道はない。その果てに何が残るのか。

第一次世界大戦の前後に活動したスイス生れの作家ヴァルザー。本書は終戦間際に出版

された彼の散文小品集である。二五の短い文章の中で、普遍的かつ自伝的な詩人の生き様を彼は書き綴っている。好んで行った散歩について。周囲からの冷たい視線。完成の見えない新作長編小説等々。各編に組み込まれた地名やモチーフ描写には、リアリズム文学を彷彿とさせる所がある。しかしこの詩人のあまりに微視的な執筆態度は、しばしば近代的世界観を突き抜け、別の小宇宙に到達してしまう。収録されている随筆「ポタンへの演説」は、その一例と言えよう。くしゃみの勢いで裂けたポタン穴を修繕するある日の「わたし」は、ふとシャツのポタンに称賛の言葉を贈る。「おまえが謹言実直、粉骨碎身こそを礎とする力、誰もが事なすや欲する感謝賞賛など必要とせぬ力を示してくれるのは、なんとすばらしいことだろう！」仰々しい演説の熱気が、漢文調の翻訳を通して強く伝わってくる。その贅辞をただの小さなポタン一つに尽くすという所に、ヴァルザー作品の可笑しみと恐ろしさが見え隠れしている。

資産も職もない中で育ち創作を続けたヴァルザー。一時の名声は大战にかき消され、散発的執筆で糊口を凌いだ。戦意高まる欧州の隅で書き綴られた彼の作品は、死後の評価と愛読者に恵まれ今に遺されている。(と)

(二二〇頁 本体一七〇〇円 1月刊)

透明性

マルク・デュガン著

中島さおり訳

早川書房

「私が殺したの
は『私』です」。

そう証言する主人
公が企てたのは不
死だった。



舞台は近未来。自分の個人情報を入力に代えて生活する時代、多くの人は位置情報や体情報等のプライバシーをデータとして供出することでBーを与えられ、比較的満ち足りて生活していた。不断に送られるデータからフィードバックによって生活をコントロールされるのと引き換えに、欲望はVR空間で満たされ、家から出なくても娯楽に浸れるような生活が送れるようになった。一方で富裕層は個人データを秘匿し、コントロールを逃れて自由を享受する。ただ、そんな人間の生活を支える地球環境は確実に悪化していた。今のままで人間は終わる。そう思う主人公は次にこう思う。いや、人間を終えて次に行くことが肝要なのだ、と。グローバルなデータ企業に勤めていた主人公は、データと命に囚われた価値基準を転倒させるため、起業し

「透明性」を立ち上げた。不死を与える。ただし、自分のデータを全て人間全体の幸福のために捧げることの出来る者に。判断するのはAIだ。飲食も排泄も繁殖も不必要な新しい身体へ。だから「私は『私』を突き落としました」。

プライバシーの少ない「透明」な、人類の幸福に寄与できる者が生存を許された世界。だが、そこから弾かれた者の中に主人公のパートナーがいた。そして……。

現代の社会状況を織り込んだこの本は予言の書となるのか、一読を勧めたい。(ねこ)
(二二二頁 本体二五〇〇円 10月刊)

絵画の力学

沢山遼著
書肆侃侃房

芸術作品は、鑑賞者に強烈な印象を与えて惹きつけたり、何かを考えこませたりする力を持っている。しかし、その力がどのように生まれているのかを明確な言葉で説明するのは、特にそれが抽象的な作品であるほど、困

難である。本書はこの一見説明不能なパワーに焦点を当て、分析を試みている。

作品は「絡み合う力の束」であり、「芸術を経験することは、振動する差異と諸力のただなかに巻き込まれることだ」と著者は言う。画布に描かれた一本の線はそこに力を生じさせる。新たな筆触が加わると、二つの筆触の間には力の差異が生まれる。このように更新され増殖していく力の拮抗の総体こそが、絵画や彫刻の正体なのである。

著者は、芸術家たちの意思とそれを支える思想が作品に力を生じさせていると考え、分析を行った。単に流派や技法を持って分解するのでは、芸術そのものを捉えることはできないだろう。しかし本書では、作家を突き動かした意思を探ることで、分析によって芸術を単純化するのではなく、むしろより複雑で繊細な組成を見出そうとしている。

著者は「作品は、作者の思考や思想の反映物ではない」とも述べている。絵画の力は、初めは作家自身のエネルギーによって生じるが、やがて作家の手を離れる。鑑賞者との対話などによって無限に増幅し、現実には作用するのだらう。芸術の持つ力とその広がりに気づくことができる、魅力的な一冊である。

(四〇八頁 本体二七〇〇円 10月刊)
(汗漢)

苦学と立身と図書館 パブリック・ライブラリーと 近代日本

伊東達也著 青弓社



近くの図書館を思い浮かべてみてほしい。どんな光景がみえるだろうか。蓋のない飲み物

物は持ち込みできません、私語を慎み、静かな空間に新聞を読むで老人や閲覧室などで勉学に励む青年たちがみえてくる。そうした日本の公共図書館に慣れ親しんだ我々は、むしろ世界のパブリック・ライブラリーに驚きを隠せないのではなからうか。私も留学中に驚くべき光景をみた。人々がコーヒーを持ちながら本を選び、仲良く談笑しながら本を読んでいたのだ。図書館というパブリック・スペースの使い方が国内外で大きく違うことに興味をもちこの選書に至った。

著者の伊東達也は図書館学を専門としていた。本書では、明治初期の無料公開図書館の歴史から、現代の勉強空間としての日本の公共図書館の成立を明らかにする。激動だった明治時代、欧米文化を取り入れ、他の政治改革と共に日本の図書館は発展してきた。図書

館に当時集っていた人々や政策を主導した歴史人物、更に建築様式など、あらゆるトピックについて述べられている。そのため、自身の関心に応じて好きな章から読むことができ。「なぜ図書館では静かにしないとけいけないのか」「いつから図書館には勉強スペースが作られたのか」など本書を読む前に感じていた自身の疑問を解消するために本書を開くのもいいだろう。

図書館学を学びながら近代日本の思想や空気に思いを馳せる。今日も図書館に向かいてみよう。(トントウ)

(二六四頁 本体二六〇〇円 10月刊)

中国戦線ある日本人兵士の日記
1937年8月～1939年8月 侵略と加害の日常
小林太郎著 笠原十九吉 吉田裕編 解説
新日本出版社



評者の曾祖父は日中戦争が始まると北支に派遣され、数年を大陸で過ごした。戦後帰国した

た彼はその体験を家族には語らず、ただこっそり咳くばかりだったという。「豚を殺してごめんなさい」幼い頃よく聞かされた話だ。

曾祖父のように戦場体験を語らぬ人々は多かった。その結果、日本の大陸での戦争犯罪は他人事として受け止められるようになったと社会学者の作田啓一は指摘している。

本書は一人の日本兵が中国戦線にて記した日記をまとめたものである。場当たりの軍事作戦に翻弄される著者たち下級兵士の過酷な日常も然ることながら、それ以上に驚かさされるのは彼らに加害者意識が欠如していることだ。ある一日の記述を引用しよう。「本日は晴天。(……) 晴天を眺めのんびりと歩く。風は寒い。本道附近の部落は真赤に燃えてゐる。」著者の目には部落の火事も最早自然風景に溶け込んでゐる。そこに火を放ったのが自分たちであることなど思い及びもしない。あるいは「徴発」と称して牛、豚、南瓜を手に入れ飢えを凌ぐ様子が度々登場する。しかしこれは真正正銘の略奪行為だ。日記はこう続いている、「御馳走仲々うまかつた」と。

日記に何を記すか、それは書く者の自由である。然れば意に添わぬ事実はいさば記されない。本書は中国戦線の様子だけでなく、兵士たちが「語らない」出来事、或いは「語らない」という行為自体をも考えさせる貴重な資料だ。この機会にあなたも歴史を「自分事」として考え直してみてほしい。(リンド)

(二九六頁 本体三六〇〇円 2月刊)

ノスタルジ

我が家にいるとはどついついことか

バルバラ・カッサン著

馬場智一訳 花伝社

故郷を思う病、ノスタルジ。かつてスイスの傭兵たちが、あることがきっかけで望郷の念を募らせて雇われ先の戦場から逃げ出してしまったという逸話に由来するこの言葉。



なぜ人はノスタルジを感じるのか？ 故郷ではないコルシカの地に懐かしさを覚えるという著者は、文学作品や哲学者の言葉を手がかりにその感覚について思索を巡らす。

本書には三つの手がかりが挙げられる。放浪の末に再び故郷の地を踏むオデュッセウス。様変わりした故郷の地で、様変わりした彼が再び認められたのは断絶の時を超えた記憶を呼び覚ます徴だった。祖国トロイアを襲い、流浪の果てに新たな土地ラティウムで新たな人々とその生を選んだアエネアス。彼が受け入れられたのは母国語を捨てその土地の人々の話す言葉を話そうとしたからだ。故郷ドイツから亡命し、一変した祖国への繋がりを通して母国語という形で保っていたアーレント。

彼女にとって祖国への思慕をつなぐものは「言語が残りました」。何かに帰属するためではなく、自分であるための母国語の存在。参照項としてデリダやハイデガーの引用を交えながら、著者は居場所を失った人々の想いを連ねて言葉にする。

ノスタルジを感じる根底にはどこかに「根付いている」感覚と、自分がそこから「切り離された」という感覚の両方があるのだという、例えば離別、旅立ち、喪失……ではそのノスタルジが癒えるのはいつか？ 本書の中で確かめてほしい。(ねこ)

(二〇〇頁 本体一八〇〇円 12月刊)

寢室の歴史

夢／欲望と囚われ／死の空間

ミシエル・ペロー著
持田明子訳 藤原書店

——あなたがもし一つしか部屋をもっていないならば、その部屋は必ず寝室である——

本書はルイ一四世における王の寝室の記述から始まる。権力の中心とされたこの寝室は公共的な場であり儀礼の空間でもあった。常

に王であり続けたいといけぬルイ一四世は病状の身においても寝室で活動したが、後年隠れ家を求め孤独を欲していた……。

そうした例外を除けば、寝室とは常に隠された空間である。そこは時に祈りの場であり、瞑想の空間であり、執筆の場所であった。人間は静寂を求めて寝室に行き、獣のような性の営みを寝台で行う。孤独と融合。本書では多様な文学や思想を通して「寝室」の様相を分析していく。寝室が多くの物語の中で語られてきたというその事実こそ、人間の想像力が生まれるブランクボックスであったということが読み取れる。閉ざされた空間で、人間は眠り、本性を現す。「婦人部屋」「ホテルの部屋」「死の床と病室」と章分けされた本書では、眠りの空間に人間の文化や多様性が現れることを描いている。

《夢・死・性・眠り・裸》。寝室は決して他者に見せないが、どこかで他者に知られたい人間の秘めた空間である。暗闇の場所を、丹念に紐解いていく中で、閉じられた人間の本性に光が当たる。

読み終わって改めて装画を眺めてみた。ファン・ゴッホ作『アルルの寝室』。稀代の画家が晩年に描いたこの作品は、隠されてきた寝室の神秘を語っている様だ。(きもの)

(五五二頁 本体四二〇〇円 1月刊)

精神分析の四基本概念(下)

ジャック・ラカン 著 ジャック・ヒラン・ミレル編

小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳

岩波文庫

フロイトを起源

とする精神分析学
ほど学問自体の評
価が分かれる学問
もないのではない

か。「客観性に乏しく、科学ではない」などと批判されることも多い。フロイトと並ぶ精神分析学の大家・ジャック・ラカンの著した本書の冒頭は、「精神分析は科学か」という問いから始まる。

本書は一九六四年の全二一回の講義録である。当時ラカンは国際精神分析協会から実践と教育に関して批判されており、精神分析家の資格を付与できなくなっていた。しかしラカンは独自の協会を作り、レヴィイ・ストロースらの支援をうけ大学で教え始める。初回の講義録の名前は「破門」である。タイトル通り冒頭は協会への批判が続くが、ラカンはその批判を通して精神分析とはそもそも何であるのかを熱く語り始める。精神分析は科学か、宗教か、研究か、実践か――。専門化された現代の多くの学問が問わなくなってきたよう



な根本的な問いを、ラカンは自らと学生に問いかける。それらの問いを考えていくうえで、「フロイトへ還れ」という代名詞の通りフロイトの再検討が何度も行われ、「無意識、反復、転移、欲動」の四つの基本概念について論じられていく。

講義の語り口調で書かれていることに加え、改訳が施されたことで読みやすくなったといえ、やはり難解で、解釈に困る文章が多い。「本書の解釈をできるだけ読者に委ねたい」という編者の意図も含め、本書で初めてのラカン原典体験を試みてはいいかがか。(石透) (三八四頁 本体一〇一〇円 10月刊)

メルロ・ポンティ

可逆性

鷺田清一著

講談社学術文庫



ファッションから臨床に至るまで、鷺田清一の名を至るところで目にする。

しかし鷺田の専門は現象学であり、「わたしはメルロ・ポンティの文章を読むことで哲学の世界に入った」と述べている。本書は全三巻に及ぶ「現代

思想の冒険者」シリーズのうち、メルロ・ポンティを扱った巻の文庫版である。

『行動の構造』から『知覚の現象学』を経て、『見えるものと見えないもの』、『世界の散文』までと帯に記されているように、本書はメルロ・ポンティの生涯の著作に鷺田が随走するように進む。難解とされる現象学に関する本であるが、主要著作のダイジェスト一覧、キーワード解説、読書案内、細かく付けられた章のタイトルと小見出しなどが添付されており、興味を持てる箇所から読むことができる。中でも本の内容へ入って行きやすいのは、鷺田が「脱線」と前置きしている部分である。例えば第二章「運動」の第四項「習慣と感覚」において、鷺田はメルロ・ポンティの感覚論・身体論の説明に芸術、とりわけ写真からの例示を多用して説明する。論旨の運びは現象学らしく往還的であるが、鷺田の引き出しの多さ、言葉選びの巧みさのせいか、退屈せずに読み進められる。

昨今メルロ・ポンティ関連書籍の発刊が相次いでいる。現代人はスマホを使い、視覚と聴覚を使った繋がりを簡単に広げられる。しかしそこには言葉になりにくい寂しさが残る。身体を経験と向き合い続けた彼の言葉がいま再び求められているのかも知れない。(石透)

(三三三頁 本体二二六〇円 10月刊)

半グレ反社会勢力の実像

NHKスペシャル取材班著

新潮新書

一昨年、京都の有名大学に通う学生らが女性達を風俗店に斡旋したとして職業安定法違反で逮捕された。事件は驚きをもって迎えられ現在でも逮捕された学生の顔写真がインターネット上に出回っている。この事件には「半グレ」と呼ばれる反社会勢力が絡んでおり、周到なマニュアルを用意して学生を教育し、女性達を毒牙にかけていた。この他にも半グレ勢力が絡んだ事件は数多くあり、本書はこうした半グレ勢力の成り立ちや警察の対半グレ作戦にNHKスペシャル取材班が迫った一冊である。

そもそも「半グレ」とは作家の溝口敦が名付けた「堅気の間でもなく、ヤクザでもない人間」のことで、それ故に暴力団対策法の対象にならず警察もその対処に頭を悩ませる。前述の半グレ勢力による犯行は大学生によって祇園で行われた。自分の生活圏にほど近い場所で開催された。大学生になり様々なことに驚きを感じ得ない。大学生になり様々な面での制約がなくなった今、怪しい儲け話への注意を喚起する一冊だ。(投稿 まつくじ)

(一八八頁 本体七二〇円 12月刊)

土葬の村

高橋繁行著

講談社現代新書

「この本はおそろしく、現存する最後と言っている土葬の村の記録である。」このどきどきとする一文から、著者の語りが始まる。

古代、中世から千年以上続いてきたと考えられている土葬だが、近年その数は急激に減少している。二〇〇五年の時点での日本の火葬率は九九・八％。土葬は火葬に比べて手間がかかる。また土葬は、村に受け継がれる風習としての側面が強く、継承が途絶えて廃れていく事例も多い。

土葬は膨大な量の儀式を必要とする。棺に入れる前に死体をがんじがらめに縛ったり、四九日まで欠かさず詠歌を歌ったり、死者を埋葬地まで送る際に、長蛇の列を組んだりと、多くの人の手と時間をかけて死者を送り出す。「ムタをいっぱいして故人を送ることが供養になる」と村人は語る。

本書は土葬の一連の流れを淡々と記録している。長く受け継がれてきた風習と、儀式ひとつひとつに込められた意味に思いを馳せ、死との向き合い方や弔うことの意味を考えさせられる一冊である。(苅漢)

(三三〇頁 本体一〇〇〇円 2月刊)

リベラルとは何か

17世紀の自由主義から現代日本まで

田中拓道著 中公新書

リベラルについて、我々はどう解釈しその語彙を使っているだろうか。本書は、リベラルがどのように使用されてきたのか国家政策や歴史の比較を通して明らかにしていく。

古典的自由主義からリベラルへの変遷などアメリカ・ヨーロッパを中心に展開される。現代で起こっているグローバル化による国家間の競争による格差や排外主義はリベラルに反するように見える。しかしこれらもリベラルをつき進めた故の対立である。こうした世界で起こる問題を論じ、更に日本でいかにリベラルが扱われてきたか、具体的な政策と共に記されている。

最後に、本書の意義とは何であるかを記しておく必要がある。それは本書の言葉を借りればリベラルという一つの「政治思想の射程」を学べることである。また日本におけるリベラルの使われ方の混沌を解くことも目的とされている。現代社会の混乱を、解釈が多様な定義のままの語彙で語るのは危険であるからだ。よりリベラルを冷静に議論するきっかけを、本書は読者に与える。(トントウ)

(二三四頁 本体八二〇円 12月刊)

《朱子学》とは何か？

《朱子学》とは何か……。あああ！逃げないで！最後まで読んで！読者諸氏は《朱子学》なる言葉は知っていても、その意味するところは知らない人が多いだろう。今回は二冊の書籍から、東アジアの「普遍思想」たる朱子学について見ていくことにする。

《朱子学》の「コヘルニクスの転回——朱子から道学諸子へ」

《朱子学》とは、狭義には「朱子の学」、すなわち南宋の朱子によって集大成された学問を指すとされる。広義には、朱子に関連する思想をも含み《朱子学》と呼ぶのが世間一般の認識だろう。福谷彬『南宋道学の展開』は「朱子の学」以外の南宋の思想に焦点を当て、その思想的な位置付けを明らかにせんとする。あまり知られていないが、南宋期には「朱子の学」以外にも、湖湘学など朱子の思想と対立する学派が複数存在していた。氏は、これらの諸学派を広く「道学諸子」として扱い、経書解釈に注目しつつその特徴を論じている。

本書の興味深い点は、朱子とそれ以外の諸学派を対等な視点で比較検討している点にある。従来の朱子学研究では、朱子の学を基準点に定め、諸学派の思想は基準点との差異で語られることが多かった。要は、諸学派の思想は「朱子の思想」という色眼鏡を通して語られることが多かったのだ。その点、本書では道学諸子の思想をそれ自体として扱い、その特徴を浮き彫りにしようとしている。



来、(広義の)《朱子学》は、朱子の思想を中心として、対立する学派の思想はその周辺に位置づけられることが多かった。しかし実際

はむしろ諸学派の思想同士に共通点が見られ、朱子の思想の方が例外的とも言える、と氏は指摘する。いわば、《朱子学》惑星、諸学派「衛星」という図式ではなく、すべては対等な星々であるという図式が提示されたのだ。この点で、「朱子の学」のみならず、諸学派の思想も含めて《朱子学》は語られるべきだと考えよう。

朱子学の広がり——中国の思想から「普遍思想」へ

朱子によって集大成された《朱子学》は、やがて国を超えて東アジアに広がりを見せる。下川怜子『朱子学的普遍と東アジア——日本・朝鮮・現代』は、題名の通り、日本・朝鮮における朱子学の特徴と、現代における朱子学の思想的意義を分析している。氏は、朝鮮の朱子学は主体的な特徴とする一方、日本の朱子学は受容的な特徴とするという。日本人は神仏習合に見られるように、神道ありきで外来の思想を受容せんとするがゆえに、朱子学も日本的な色彩を強めた受容的なものになった、と氏は指摘する。

それでは朱子学の現代的意義・各国における朱子学の変容の意義は何か？氏は、性を善と見る考え(性善説)に基づく朱子学的な思想が、近代の福祉国家的思想と合致する可能性を指摘する。その一方で、日本における朱子学の変容、すなわち、主体的な思想から受容的な思想への変容には、「あまり意義を見出すことはできない」と論じている。日本的な朱子学に意義を見出すことは、朱子学研究の今後の課題の一つと言えるのかもしれない。

《朱子学》とは何か……。それは単なる朱子の学以上の意味を持ち得ることが確認された。時代も国も越える悠久の思想に思いを馳せつつ、筆を置くことにしたい。

(出席点)

歴史を「物語る」ということ：ロジックとその限界

あるいはちょっと哲学をかじったことのある人ならば、「歴史哲学」と聞いて、「絶対精神」にまつわるヘーゲルの議論や、マルクスによる「唯物史観」といった事柄を連想するかもしれない。しかし、今回はそのどちらとも異なる切り口で、歴史を哲学することとしたい——すなわち「歴史の物語り論（ナラトロジー）」である。

「物語り」としての歴史

私たちが「歴史」に触れるのは一体どういふときだろうか。歴史書などの史料に書かれた、歴史的な事件に関する記述を歴史家が紐解き、博物館に展示された資料がそんな出来事の発生を今に示す。ある歴史の出来事と、それに関する（資料の解釈も含む）歴史叙述という独立した二項の関係——「物語り論」はこのような図式に異を唱える。野家啓一は『物語の哲学』の中で、「歴史の出来事は、物語行為によって語り出されることによって初めて、歴史的事実としての身分を確立することができる」と述べ、歴史の出来事と言語的に制作された歴史叙述との間の不可分の関係を示している。

当然のことながら私たちは、今現在そこにはない歴史や過去のあり様を、客観的な「過去自体」と対応させながら云々することができない。このとき歴史の出来事の成否（歴史的事実）は、物語行為によって紡がれる「歴史叙述」の内容如何へと託される。このとき、歴史的事件に関する記憶が、原因と結果の連鎖を含む物語の形に構造化されることで、最も整合性の高い解釈（叙述）は構成される。私たちがその存在を認めるところの歴史の出来事は、すべてその叙述の上に立脚するものであり、逆にこのような歴史叙述なくしては、歴史的事実が事実として認められることもない。

「物語り論」と過去の实在性

ではこのとき、過去の实在性はどのように捉えられるだろうか。同じく野家の『歴史を哲学する 七日間の集中講義』によれば、過去存在とは一種の「理論的構成体」である。現行の物理学の理論体系は目に見えない「素粒子」の存在を指定し、「京都大学」のような社会的組織の存在は、社会的制度の信念体系に支えられている。このことと並行して、「過去物語り」と呼ぶことのできる背景理論が過去の存在を構成する、と野家は主張する。すなわち、過去に起きた（それゆえに今ここにはない）出来事が存在したということは、複数の（主観的な）エピソード記憶を擦り合わせてゆく中で、現在に対し最も整合的なものが（間主観的な過去として）、現在から遡及的に生成される、ということなのである。

「物語り」の限界

真人成人の『歴史の哲学 物語を超えて』では、このような「物語り論」の方法論が抱えるいくつかの難点が紹介されている。たとえば、凄惨な歴史的事件の現場を生き延びた当事者が、後にその体験を物語る場面を考えてみよう。そこで見聞きしたものに關する彼／彼女の証言が、その事件の心的外傷への防衛機能から本人の意図とは関係のないところで抑圧されてしまう可能性は否定できない。とすれば原理的に、「物語り」から構成される歴史的事実というものには限界があるのではないかと考えることができるのである。

このように、寄せられる批判の数も少なくない。「物語り論」だが、その方法論は不思議な魅力をもっている。興味をもたれた方にはまず、『歴史を哲学する』から手に取ることを薦めたい。（八雲）

編集後記

こんにちは。三月から編集委員になりました、茫漠と申します。「茫漠」というペンネームは私の心象風景をイメージしています。私は自分をか弱い存在だと思っています。人生は分からないことばかりで、果てがなく、毎日その広大さに立ちすくみながら生活しています。

書評には、評者にとって本がどのような存在であるのかが現れていると思います。私にとって本とは、とりとめのない日常に寄り添うものです。これから、茫漠なりの視点をお届けできればと思います。(茫漠)

はじめまして。編集委員として今月から活動していますトントウです。北欧政治に関心をもち、日々勉強しています。

ペンネームでもあるトントウというのは、フィンランドにいる小さな妖精で、人々がいつも楽しく過ごせるように火事や病気から守ってくれます。トントウには役割分担があり、クリスマス、サウナのトントウ等様々です。私は、あるかは分かりませんが、本のトントウとして皆さんの読書の時間を豊かにするお手伝いできればと思います。よろしく願います。(トントウ)

当てよう！ 図書カード

今月号の特集は「短編」でした。いかがでしたでしょうか。ところで、私は生粋のメタラーなのですが、実は世界で一番短い曲としてギネスに認定されている“You Suffer”という曲(1.316秒)は、とあるメタル・バンドによって作曲されました。では、そのメタル・バンドとは次のうちどれでしょう。

1. ベヒーモス
2. テスタメント
3. スレイヤー
4. ナパーム・デス

(ばや)

《応募方法》 読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiy@sc-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締め切りは5月15日です。

12月号の解答

12月号「病除けなどの効果があるとして冬至の日に風呂に入れる風習になっているものはどれでしょう?」の解答は、2. 柚子でした。柑橘類は香りでもリフレッシュしそうですね。応募者10名中10名の方が正解でした。図書カードの当選者は、かえるさん、ムイシュキンさん、よっさんさん、鈴木さん、Nomさんです。おめでとうございませう。(ねこ)

読者がらひひひ

○私に限らず多忙な現代人にとって「本を一冊読む」ことは時に困難である(気がする)。「綴葉」は、スキマ時間に手に取ってある一冊の本のことを知った気になれるため、我々にとって非常に欠かせない存在である。これからも愛読します。(法・たんま)

——そうですね、今はオンライン授業や在宅ワークなど家にいても「やらなければならぬ」ことで時間を取られるうえに、「ついスマホで時間をつぶしてしまっ。まとまった時間が取りづらいですね。短時間で読める「紹介まとめ」として『綴葉』を活用して頂ければ幸いです。あ、でも気になった本があったらぜひ生協で買って下さい。出会いは一瞬でもそれがもしかしたら永遠になるかもしれないので。

○学問の分野ごとに学びたくなる小説をピックアップした特集をしてほしい。

(農・ハワイ人)

——小説はまあまあ読むのですが、学問が重要な要素として登場する小説、というのは注意したことがあります。と、盲点です、ありがとうございます。とりあえず、自分の分野で探してみようと思います。(ねこ)